

家庭において親は子どもに どう関わったら良いのか

無 藤 隆
(白梅学園大学)
(名誉教授)



家庭において親は子どもにどのように関われば良いのだろうか。時代は働き方改革の動きの中で親が家庭にいる時間も増えて行くであろうし、また母親任せではなく、父母ともに育児に携わるのが当然という感覚が増えてきている。とはいえ、子どもの年代などにより関わり方はかなり異なるので、発達の時期ごとに対応のポイントを整理してみよう。主に発達心理学などの知見を元にするが、より専門的な事項は関連書を参照してほしい。なお、家庭として両親と子ども一人二人程度を想定するが、一人親家庭であろうと同様のことが言える。また保育所に小さい時期から預けても家庭での対応がしっかりとあれば問題が起きないことも分かっている。

乳児期において大事なこと

子は親の元に生まれ、単に乳を与えられ、生きて行くに留まらない。何より愛情を受けて育つのである。愛情とは愛していると親が思う感情から発するのであるが、それが具体的な行動としては、乳児とのやり取りを丁寧に行うことへと展開することで子どもの発達に意味をなす。

それは一方的に親が子どもに声を掛けるとかあやすということではない。むしろその逆に、子どもが声を出し、手を伸ばし、微笑むことに対して、同じように、声を出し、手に触れ、微笑むことなのである。そういう応答的な関係を維持することが最も基本となる関わりである。もちろん、最初は大人が声を掛けて、それに乳児が応じることでも良い。大切なことは子どもと目と目が合い、やり取りが成り立ち、出来れば、それがいくつも続くことである。それを通して、子どもは親の愛情をいわば体感し、次第に親という存在を心の底に保持するようになる。ちなみに、温かさがあることが言うまでもなく大切であり、例えば、乳児がむずかったことに対していらいら、叩くことという負の連鎖は、全く乳児を無視することと同様に子どもの発達に否定的な影響を及ぼす。

そのことは24時間常に親が子どもに寄り添い、子どものすること一つ一つにもれなく応答しなくてはならないということを意味しない。時に無視されたりすることもあるし、むずかってどうやっても機嫌良くならないこともある。大事なことは長い時間無視されたり、厳しい罰を与えられることがないということである。それに加えて、乳児（もっと大きくなっても）には親との一対一の関係が大切である。いわば親を占有できる時間が長くなくてもよいから日々確保されることである。

子どもにはかなりの個人差が生まれつき存在する。例えば、ちょっとした音がしてもすぐに目覚める子どももいるし、ぐっすりと寝込んでいる子どももいる。夜中にぐずってもすぐに寝

付く子どももいるし、かなりの時間抱っこしていないと寝付かない子どももいる。それはかなりのところの子どもの生まれつきの気質による違いによる。人見知りの程度も極めて大きい子どももいるし、比較的になすぐに慣れて人なつこい子どももいる。そういう違いは大人でもあるような、例えば社交性の違いと同様である。それ故に、一人の乳児に有効だったやり方が別な子どもには有効であるとは限らない。怖い刺激に極度におびえやすい子どもだったら大きな声で叱ることも注意した方が良いが、案外平気な子どももいるのである。

乳児がハイハイし、立ち上がり、よちよち歩きを始めると、家庭の部屋のあれこれを探索し始める。乳児はおそらく生まれつき、人の表情に敏感であるが、同時に様々な物の動きについても感受する傾向がある。騒音を控えて、子どもに意味のありそうな声や音に留意し、また回りに触っていきり、遊べるおもちゃやおもちゃになるような素材を用意することが子どもの知的な発達の始まりとなる。その際、大人がちょっと遊びのモデルを示したり、ともに遊びながら、少しずつ子どもだけでやれるように導くと、子どもの遊びが広がるだろう。

子どもが声を出し、次第にその声が言葉に似たものになっていく。そうしたら、それを大人が真似て、意味ある言葉として応答していくことが言葉の発達を促すことになる。

幼児において大事なこと

幼児期とは子どもがかなりしっかりと歩き、さらに小走りができるくらいの時期から始まる。その時期に急速に言葉が発達し、大人との言葉によるやり取りも多少とも意味が理解できるものになるだろう。ものを見立てて遊ぶことも増えていく。それらはその背景には大脳の思考過程の成熟が進むことが関与しており、とりわけ記憶して、その場でないところでも思い出せるようになる、思考力を展開できるようになる。特に言葉による概念の命名が進み、その場がないものを思い浮かべて考えたり、抽象化したり（例えば、犬のぼちは「ぼち」であり、「犬」であり、「動物」である）するようになる。

子どもが自在に歩けるということは子どもが探索する世界が著しく広がるということである。それは何より歩く力を育て、ひいては運動能力を伸ばすのであるが、さらに回りの環境にある種々のものについての知識を得ていくことでもある。散歩したり、買い物に歩いて行ったりすると、犬や車や電車やまた工事現場があり、子どもや大人や年寄りや様々な人たちがいることに気づく。公園には滑り台やブランコがあり、ふだん出来ない体の動きが可能となる。砂や水や土や泥や木の葉やどんぐり（つまり木の実）や花びらや時には雨や雪に触れる。一挙に子どもの世界は広がる。それはもちろん大人がどのくらい子どもを外に連れ出すか次第であるので、日々外に連れ出すことが重要になる。また絵本を見ることで周りの探索で見たことが確認され、知識として広がり、また物語として楽しむようにもなるだろう。

幼児期には友達との遊びも増えていく。最初はそばにいて、似た遊びをしているだけだったのが次第に互いに協力して役割分担をして遊ぶように進んでいく。幼児期に友達関係のやり方の多くを学んでいく。いざこざを拡大せずに折り合いを付けつつ遊ぶやり方や、誰もが少しずつ意見を出して、皆の意見で遊びを進めることなどこの時期に身に付けることは多々ある。そこで同年代の子どもと遊ぶ機会をいかに確保し増やすかは、少子化が進んでいる現代社会において重要なことになっている。そのために、幼稚園・保育園などは3歳くらいから通うことが増えてきた。園のやり方にもよるが、子どもたちが互いにどう遊ぶかを考え工夫するようにして、

一律の遊び方を大人が決めて、その通りに行動するやり方でないことが望ましい。

以前は近隣の子ども集団において様々な年齢の子どもが集まって遊ぶことが見られたわけだが、今はその役目は幼稚園や保育園に移っている。そこがない日などには、地域の様々な集まりなどにおいて子どもたちの集団を可能にする場とすることも増えている。数名以上の集団というのは単に互いに仲良くすることを超えて、その集団の規範を守るということが必要になる。とはいえ、それは大人が一方的に教えて身に付くというものではない。大人が手本を示す。子ども同士で守るべきルールの意味を考える。遊びの中でルールを変えたり作ったりする。そういう経験がルールの理解を増し、さらに単に仲よし同士を超えた集団としてのあり方、ひいては社会としてのあり方があるのだということに目覚めさせていく。これもまた幼児教育の場面の大きな効用であろう。

その一方で、ルールを守るのは個々の子どもにはそう簡単なことではない。自分がやりたいこととルールを守ることが一致するとは限らない。また自分がやりたいことと友達がやりたいことが衝突することもある。自分がやりたいことが難しいあるいは時間が掛かりすぎて嫌になったり、すでに通用しないやり方に固執してしまい、動きが取れなくなることもある。そういった折に自分の感情や考えをコントロールして、特に否定的な感情が過大にならないように収めるとか、考えを切り替えて別な見方を試みるとか、いくつかの意見を調整して妥協案を作るとか、そういう自己統制（自己調整）のやり方を練習する必要がある。それは特に幼児期の後半に著しく発達するのであるが、同時に、そういう自分のやりたいことと周りからの制約との折り合いを自分で付ける工夫の機会があることと、さらにそれを助ける周りの子どもや大人の関わり方が不可欠である。それは大人からの命令でも放置でもなく、ヒントを出しながら、子どもの気持ちを穏やかにするように支え、良い工夫が出ることを促すことである。

学童期・思春期に大切なこと

小学校の低学年を過ぎるにつれ、多くの子どもは精神的に安定した時期を迎えるようになり、徐々に親の影響を離れて、友達集団のあり方を志向するようになる。それは服装や話し方やテレビやゲームの好みなど表面的なことが多いが、しかしその時期の子どもには仲間として認められるかどうかという点で重大なことである。とはいえ、親から離れるという程ではなく、親の見ているところで遊ぶとか、子ども同士で遊んだことを親に報告することも多いだろう。親はそういう姿勢を取ることで、子どもの生活をある程度自由にしながらも、危険なところにはいかないように配慮できる。

思春期を迎えるとそういった穏やかな子どもの振るまいがかなり変化していく。必ずしも全員が親に激しく反抗するわけではなく、そういう子どももいる一方で、内にこもる傾向が出てくる子どももあり、親子の間の会話は以前のように維持されながらも、子ども独自の世界を持つことも増えるだろう。それは子どもが自らの性的な成熟と身体的な変化とそれに伴う心理的な気持ちの動揺に自分として対処せざるを得ないことの反映であり、同時に、親から離れて将来一人の大人として生きていくためのいわば予行演習の時期である。

この時期には個人差もかなり大きく、一方で非行やゲームへの過度の熱中なども起こるが、そうではなく大人から見て健全とみられる生活を行う子どもも多い。だが、後者の子どもたちが悩みがないわけではないので、親としてそれとなく会話を日々多少とも続け、子どもの気持

ちの揺れ動きに辛抱強く付き合っていく必要がある。親しい友人ができることがこの大変な時期を乗り越えるのに有用なのだが、その友人がかえって非行行動に誘い込んだりする危険もあるので、その点も留意しておくといよい。とはいえ、友達を誰にするかをもう親が指示できる年代ではないので、むしろ率直にその様子を聴き取りながら、あまりの危険ではない限り、緩やかに許容するのが良いだろう。

生活時間の管理も今時の子どもには大事になる。夜遅くまで起きていて寝不足のまま、朝起きて学校に行くようだと学校の授業についていけなくなる。勉強ならまだしも、ゲームやSNSで夜更かしすると、学習に差し支えるのみならず、ネット上のトラブルに巻き込まれることも増える。そこをどう親が見守るかは難しいが、生活時間としてゲームやスマホの使用時間を一定程度に制限することなどは役立ちそうである。

思春期は子どもの知的感情的な働きそのものが再編成されるときでもある。脳やホルモンのレベルの変化も著しい。抑うつが増したり、危険をあえて指向して、危ない行動を取りたがることも増える。考えの混乱も大きくなり、自分とは何かという疑問も出てくるだろう。一方で、理想に燃え、その実現を願うようになる時期でもある。そういった折に優れた大人や本やテレビ番組やネットでの情報の果たす役割は大きい。

経営側の子どもを持って働く人への配慮点とは

家族がともに過ごす時間を確保することが何よりである。オフィスで働くにしても、リモートワークにしても、それをいかにして一定の時間に止め、必要なだけ働くが、それ以外を心身の健康を保ち、また家族の団らんの時間とするのである。子どもは親を頼って生きている。乳幼児は言うまでもなく、思春期になって反抗などすることがあっても、そうである。そこに気持ちを通わせることはたまに顔を合わせて、話すとか、ましてお説教することでは成り立たない。ともに一緒に同じ場において、楽しいことを家の中でまた外で行って過ごす時間が貴重なのである。気持ちとは1つの表情1つの言葉で伝わるといより、ともに過ごす中でふと目を合わせたたり、笑い合ったり、また1つのことに興味を持って見ていたり、一緒のことをしたり、という中で少しずつ染み通るようにつながっていく。

仕事から来るいらいらや夫婦間の諍いなどを子どもの前で見せてしまったり、子どもにぶつかけたりもたまには仕方がないが、しょっちゅうだと子どもに逃げ場がなくなり、気持ちが断ち切られてしまう。仕事のことは何とか仕事の中に収めるなり、散歩や運動などで和らげ、夫婦の会話はそれとして行うように努めて、子どもがいるときには家族という団らんの時間なのだ意識して、互いにくつろげるようにすることが一番の基本である。

子どもはそれぞれの年代でいろいろな心身の問題を時に起こすことがある。それに対して親として緊急に対応せざるを得ないこともあるだろう。そういったことへの柔軟な働き方をいかにして作っていくかも大いに必要なことである。家族が健全に機能してこそ、働く意欲と力も湧いてくるのであるから、長い目で見れば、プラスの意味が大きい。そういう柔軟な組織のあり方に経営側が配慮することが必要なのであろう。